

図4 佐賀南部地区農業共済組合組織機構図

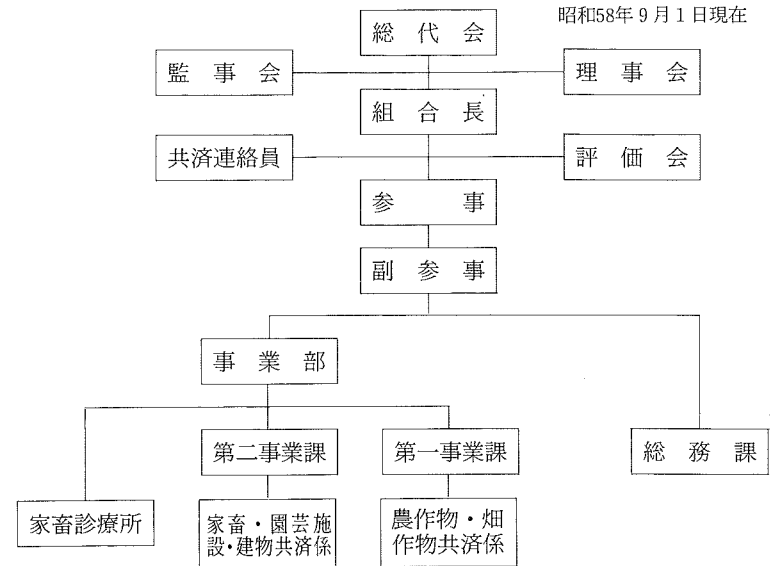


表19 役員等数

(単位:人)

総代	理事	監事	損害評価員 委員	損害 評価員	共済 連絡員	診療所 運営委員	職員数
131	35	17	30	138	138	19	17

表20 諸富町水稲・麦被害と共済金支払状況

(単位:戸、a、円)

区分 年次	水 稲			麦		
	被害戸数	被害面積	支払共済金	被害戸数	被害面積	支払共済金
50	243	3,854.7	2,642,400	295	23,175.5	10,818,360
51	420	14,389.6	27,335,880	289	18,456.7	12,211,950
52	76	2,006.5	964,170	293	31,809.6	38,286,888
53	326	11,726.3	17,432,116	189	7,058.3	4,372,182
54	79	1,971.0	1,134,397	207	7,876.0	6,463,638
55	456	13,629.0	9,990,112	250	9,155.9	8,404,414
56	12	203.4	426,528	247	10,948.4	14,921,977
57	11	376.7	492,172	270	13,887.0	24,298,304

資料:町産業課

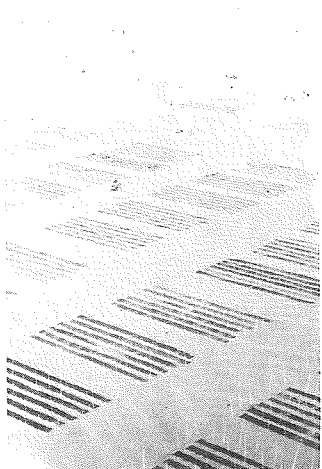
移譲がなされた。町振興課(現産業課)農業共済係として、水稲、麦、家畜、建物などの共済事業に取り組み最近においては、新種共済(畑作物共済、園芸施設共済)の的確な普及と定着を図り、農家が蒙る不慮の災害に対し、確かな補償を通じ、農業生産力の発展に資し、農業経営の安定向上に努めてきた。農業生産の多様化に伴い共済種類の拡大、制度の複雑化、農業予算の緊縮化など農業共済事業をとりまく情勢は厳しく、事業区域(規模)の拡大により組合運営の安定化を図るため、昭和五十八年三月三十一日佐賀郡南部四町(諸富町、川副町、東与賀町、久保田町)をもって佐賀南部地区農業共済組合(所在地・川副町大字鹿江六二五)として合併設立がなされた。国の政策保険事業として、「確かな補償」実践運動の展開により農業共済事業の整備拡充に努めている。

## 六水産業

### (一) 概況

諸富町の漁業は、ノリ養殖が主体であるが、もともとは沿岸漁業としての網業を専業とし、源式網(クルマエビ、シャコ)、流し刺し網(すずき)、固定式刺し網(くちぞこ)などによる刺し網漁が主だった。

大古から「母なる海」といわれるように、有明海は魚介類の豊富な海である。わが国最大の干満差を誇り、干潮時には広大な干潟を形成する独特の自然環境が魚介類の生息、海藻類の養殖に好条件をなしてきた。外洋と異



ノリ養殖風景

なつた有名な干満の差が湾内の浄化作用の役割を果たしてきた。中でも今日のノリに代表されるように、有明海は人工養殖漁業に最も適した漁場である。しかし戦後この有明海に出漁する船が増加し、また魚介類の豊富なこの海も極度の魚不足を生じ、網業ばかりでは生活がおもわしくなく一時は、もがいの養殖を手がけるが、その成果はかんばしくなく、昭和二十三年の農業の使用開始で魚介類が全滅。昭和二十五年には十数年ぶりの赤

潮が発生し相当の打撃をうけた。

漁法も「獲る漁業から創る漁業へ」と転換され、漁業の浮揚を求めて、昭和二十六年、操業先の熊本県菊地川河口で見たノリ養殖に江頭杉太郎を中心に五人で挑戦することになる。『佐賀県政史・資料編』に、「この年、佐賀郡新北村でノリの試験養殖始まる。戦後、有明ノリ養殖の端緒」とある。

戦後わずか三〇数年という短期間にめざましい技術の進歩を遂げ、さらに漁場開発や新しい漁場利用方式を編み出しながら急速な勢いで成長し現在では全国有数のノリ主産地にまで発展を遂げた。

この間のノリ漁家の歴史を振りかえれば、開拓者には必ず苦勞がつきまとうもので、その苦惱は並々ならぬものであつたらうと思われる。海に生きる有明漁民のバイタリティーに富むエネルギーこそ佐賀有明漁民のノリ養殖業を現在の地位まで押し上げてきた主体的要因であつたといわなければならない。

本格的に産業としてのノリ養殖業が普及、定着してくるのは人工採苗技術が開発された昭和三十年代初頭であ

り、また昭和四十二年の白腐れ病被害を契機として、県(有明水試)、漁連、漁協、漁民が一体となって、採苗から撤収まで徹底した共同管理に努めたことも見逃すことはできない。ノリ養殖業は、自然環境に大きく左右されるが、ノリ網自体の過剰傾向や技術の進歩による作業の近代化、機械の大型化により全国的に質より量への傾向を生み、従来まで順調な伸びを示してきたノリ価格も低迷の兆しをみせ始め、生産コストの上昇や一段と厳しさを増した産地間競争などと相まってノリ養殖漁家も経営圧迫など県産ノリの抱える問題点は山積している。協業化、漁場の育成、環境の改善などにより危機打開を図り、有明漁民の生活安定のため基幹産業のノリと、貝類の栽培漁業の展開による周年操業体制の確立が望まれている。

## (二) 諸富町漁業協同組合

### 〔組合沿革〕

明治三十九年七月、新北村漁業会が設立。

明治四十五年一月、新北村漁業組合と改名。

昭和十四年六月、保証責任新北村漁業協同組合となる。

昭和二十四年七月、新北村漁業協同組合となる。

昭和三十年四月、東川副漁業協同組合を吸収合併し、諸富町漁業協同組合として発足。

漁協の主な施設整備状況を掲げると、昭和三十五年新農山漁村対策振興資金により乾ノリ検査場(木造、平屋

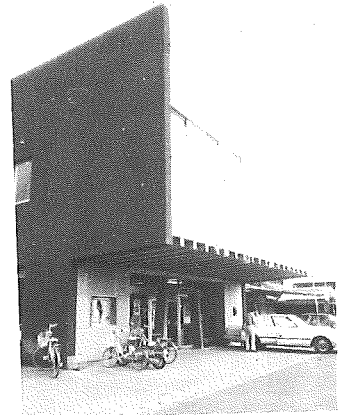
建、一二三平方メートル、昭和四十年、五十三年に構造改善事業により糸状体培養場（軽量鉄骨平屋建、三九三平方メートル・軽量鉄骨平屋建、四二〇平方メートル、昭和五十五年には沿岸漁業振興特別対策事業により海水運搬船係船所（プレテン・ホロースラブ式三・〇メートル×一五メートル一基）が建設された。

この間、昭和四十三年には事務所が現在地（寺井津一四六番地二）に鉄筋コンクリート二階建（延面積四三二・二六平方メートル）で完成した。

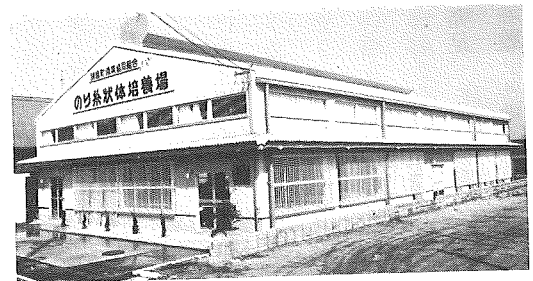
漁協の現在の組合員は、一七三名であり、歴代組合長は次のとおりである。

〔歴代漁協組合長〕

三島 国雄	昭和二十四年五月八日	昭和二十五年九月二十一日
野口 伊六	昭和二十五年九月二十一日	昭和二十八年五月三十一日
田中 儀平	昭和二十八年六月一日	昭和四十一年五月三十一日
江頭 杉太郎	昭和四十一年六月一日	昭和四十六年五月三十一日



諸富町漁協



ノリ糸状体培養場（人工採苗場）

田中 儀平	昭和四十六年六月一日	昭和四十八年五月三十一日
大木 義雄	昭和四十八年六月一日	昭和五十一年五月三十一日
古賀 平次	昭和五十一年六月一日	昭和五十七年五月三十一日
野口 清	昭和五十七年六月一日	現在

当漁協の主幹業種はノリ養殖で、生産枚数及び生産金額の推移は表4の通りである。

〔信用事業〕

漁協の年度末貯蓄は表5の様に年々増加している。これは毎月十七日を「皆貯金日」、又、十月、三月を「特別貯蓄推進月」とするなど婦人部をはじめとする活動の成果でもある。昭和五十六年から昭和五十七年にかけてつば状菌や赤ぐされ病の発生により生産金額が減少し、昭和五十七年には農林漁業金融公庫から災害資金を九、六〇〇万円、佐賀県信用漁業協同組合連合会から漁業経営維持安定資金を四、六三〇万円、組合員に対して貸出しを行い、延滞した債務の返済に当てた。昭和五十四年には、コンピュータの導入により普通貯金、定期貯金業務の信頼性が格段に向上した。そして、昭和六十年を目標に、系統機関である信漁連とのオンラインの計画が着々と進められている。

〔購買事業〕

表6に示す通り、購買品の売上高は年々増加しているが、昭和五十三年度がピークである。これは、全自動乾燥機やその他の機器類を購買事業として取り扱いをしたためである。

表4 諸富町ノリ生産高の推移

(単位：枚、千円、円、人)

年	生産枚数	生産金額	平均1枚単価	経営体
36	3,702,200	18,270	4.93	33
37	7,355,100	58,329	7.93	48
38	15,684,600	257,325	16.40	75
39	24,484,500	296,847	12.12	88
40	25,768,700	388,236	15.06	100
41	31,617,700	421,782	13.34	124
42	7,955,700	140,843	17.20	138
43	18,240,800	309,561	16.97	140
44	30,534,200	462,222	15.13	141
45	43,107,500	621,930	14.42	141
46	46,510,200	705,024	15.15	145
47	44,493,300	940,201	21.13	145
48	71,502,000	827,205	11.56	145
49	76,757,200	1,134,481	14.78	145
50	85,324,400	1,204,296	14.11	145
51	75,469,500	1,355,036	17.95	145
52	84,966,900	1,986,714	23.38	144
53	96,314,200	2,384,053	24.75	145
54	64,440,900	1,725,576	26.77	144
55	76,522,200	1,561,634	20.40	146
56	70,876,000	1,196,661	16.88	146
57	78,781,100	1,666,864	21.15	145

資料：漁協

表1 経営体数の推移

(単位：戸)

年度	昭和51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年
経営体数	145	144	145	144	146	146	145

資料：漁協

表2 組合員数の推移

(単位：人)

年度	昭和51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年
総計	190	187	186	179	178	177	173
正組合員	186	183	182	179	178	177	173
準組合員	4	4	4	0	0	0	0

資料：漁協

表3 漁業種類別生産量

(単位：kg)

年次	昭和46年	昭和53年	昭和54年	昭和55年	
総数	1,791,325	3,806,000	3,557,000	2,454,146	
海面漁業	魚類	45,110	9,000	2,000	26,330
	えび類	2,090	1,000	—	600
	小計	47,200	10,000	2,000	26,930
浅海養殖	ノリ	1,744,125	3,796,000	3,555,000	2,421,816
	その他	—	—	—	—
	小計	1,744,125	3,796,000	3,555,000	2,421,816

資料：漁協

海漁業協同組合連合会)傘下の漁業協同組合が一体となって、ノリの栽培時期やノリ網撤去期日の統一を行っている。

育苗時期においては、海況情報を配布し、漁場の水温、気温、塩分濃度、栄養塩の量、病害の伝播状況など、組合員に正確、且つ敏速に情報を流している。又、生産されたノリは、全国の商社が一同に会して、入札会を開き、単価の安定を計っている。

製品向上、結束指導等の講習会を開催して、ノリ販売促進に大きく寄与している。

〔利 用 事 業〕

ノリ糸状体(ノリ種)の栽培管理を

表7 年次別漁船勢力表

(単位:隻、トン)

年次	無動力船数	動力船隻数						動力船総トン数
		合計	1t未満	1t~3t	3t~5t	5t~10t	10t以上	
昭46	334	192	34	22	136	—	—	587.9
47	313	183	33	15	135	—	—	561.4
48	339	192	35	25	132	—	—	570.2
49	342	196	33	28	134	1	—	617.8
50	338	200	26	36	137	1	—	660.7
51	299	199	25	41	132	1	—	690.6
52	363	209	25	47	136	1	—	688.0
53	371	214	31	44	138	1	—	753.3
54	362	226	36	51	138	1	—	778.5
55	377	247	38	64	144	1	—	827.4
56	404	246	35	69	141	1	—	823.7
57	507	243	36	70	136	1	—	804.1

資料:漁協

表5 年度別貯蓄推進実績

(単位:千円)

年度	貯蓄高
45年	203,000
46年	316,580
47年	485,580
48年	520,000
49年	541,000
50年	656,000
51年	817,000
52年	1,260,000
53年	1,592,000
54年	1,278,000
55年	1,313,270
56年	1,112,430
57年	1,636,000

資料:漁協

昭和五十五年度は、石油危機をめぐる代替エネルギー問題化の中で、近年の全自動乾燥機の普及や漁船の増加や稼働率の上昇に伴い、石油類の需要が、大幅に増加している。

又、養殖資材の増加は、合成樹脂製支柱が従来の竹に比べて、使い勝手の良さや耐久性などが買われて、その普及が著しい事が伺い知られる。以上の様に、昔の支柱は竹、船は木船であったが、現在は合成樹脂製の支柱竹に、船はFRP製にと、漁業者の生活の中にも、石油化学製品が浸透していった事が容易に知られる。

〔販 売 事 業〕

「うまい佐賀ノリ作り運動」をスローガンに有明漁連(有明

表6 年度別購買品売上高

(単位:千円)

年度	45	47	49	51	53	55	57
石油類	14,318	8,934	196	41,979	35,044	72,735	94,905
漁網類	10,080	12,829	9,675	8,789	19,559	26,555	14,142
機器類	23,607	30,453	54,346	44,465	96,798	15,586	12,718
ゴム製品	1,616	1,446	1,417	2,362	2,046	2,854	1,851
養殖資材	578	716	2,232	968	76,766	151,390	72,821
その他	13,691	15,979	58,883	49,086	86,244	330	154
合計	63,890	70,357	126,749	147,649	316,457	269,450	197,591

資料:漁協

昭和四十二年	昭和四十五年	深町哲郎
昭和四十六年	昭和五十年	三島真次
昭和五十一年	昭和五十二年	大木春義
昭和五十三年	昭和五十四年	江頭杉義
昭和五十五年	現在	北村勝洋
〔漁協婦人部〕		
昭和三十八年	昭和四十三年	田中チモ
昭和四十四年	昭和四十六年	江頭ミワ
昭和四十七年	昭和四十八年	松本タマノ
昭和四十九年	昭和五十年	島崎八重
昭和五十一年	昭和五十二年	田中キサエ
昭和五十三年	昭和五十四年	大木ミドリ
昭和五十五年	昭和五十六年	田中キサエ
昭和五十七年	現在	茂田喜代子



全国大会における研究部員の研究発表

確立する為には、第一番目に優良品種の選定が求められる。次に、糸状体の生理現象の円滑化を計るため、採光、貝殻の洗滌、海水の交換等がきめ細かく行われなければならない。中でも海水の交換には有明海の沖合より適当な塩分濃度の海水を、多量に供給する必要がある。

昭和五十三年十一月に完成した「もろどみ丸」(排水量六・二七ト四〇馬力)は、海水運搬船として活躍している。これは、当漁協の組合員のノリ養殖に対し、外部から購入する事なく、安定した種貝を十分に手に入れる事が出来、大きな力となっている事は言うまでもない。

〔指導事業〕

漁協には今までに述べた事業の他に、研究部、青年部、婦人部などの団体を指導する事業がある。

その団体の構成員は、組合員、その子弟、婦人などである。事業内容は漁家生活の安定、うまい海苔づくり、製品の流通、今後の漁業のあり方等の研究及びその指導である。

各部の歴代の部長は次のとおりである。

〔研究部〕



海水運搬船「もろどみ丸」



ノリの検査風景